HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ語から見たゲルマン語（12）：進行形と不在構文（付 ： 正誤表）
Author(s)	清水, 誠
Citation	北海道大学文学研究院紀要, 171, 1（左）-38（左）
Issue Date	2023-12-08
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.171.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90878
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_171_Shimizu.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究院紀要 171 （2023）

ドイツ語から見たゲルマン語（12）
── 進行形と不在構文（付：正誤表）──

清　水　　誠

German as a Germanic Language (12)
—Progressives and Absentives (with Corrigenda)—
(*Bulletin of the Faculty of Humanities and Human Sciences* No. 171.
Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido University.
Sapporo/Japan. 2023. ISSN 2434-9771)

SHIMIZU, Makoto
(mshimizu@let.hokudai.ac.jp)

1．英語の進行形の発達―オランダ語との比較[1]

2003 年にマクドナルドが銘打ったキャッチコピー “i***'m lovin***' it”，JR の車

[1] 本研究は清水（2019）（2020）（2021a）（2021b）（2021c）（2021d）（2022a）（2022b）（2022c）（2023a）の続編であり，科研費の助成による（ゲルマン語類型論から見たドイツ語の新しい構造記述，基盤研究（C）（一般），19K00540）。カッコ内の用語は原則として英語名による。用例などで使用する言語名の略語は次のとおり。ア：アイスランド語，ｱﾌ：アフリカーンス語，英：英語，イ：イディッシュ語，オ：オランダ語，古英：古英語，ザ：(西)低地ドイツ語北低地ザクセン方言, 初近英:初期近代英語, ﾁｭ:スイスドイツ語チューリヒ方言，デ:デンマーク語，ド:ドイツ語，西ﾌ:西フリジア語，ﾆｭ:ノルウェー語ニューノシュク，ブ：ノルウェー語ブークモール，ﾌｪ：フェーロー語，ﾌｪﾘ：北フリジア語フェリング方言，モ：北フリジア語モーリング方言。なお，巻末には，これまで発表した(1)～(11)について確認した誤植・誤記の訂正を記す。

10.14943/bfhhs.171.l1

内放送でよく知られた “We ***will be stopping*** at every station.” をはじめ，英語の進行形の用法は実に多彩である。単純形（＝非進行形）と袂を分かって17/18 世紀に確立し（中尾 1983[2]: 182），高度に文法化した英語の進行形は，ゲルマン諸語に類例を見ない。ただし，他の現代語にも進行形に準じた構文は存在し，そのどれもが「be＋現在分詞 -ing」の形式とは異なっている。たとえば，次のオランダ語の「現在分詞 -ende＋zijn（英 be）」は英語と似ているように見える。

(1) オ Hij ***is herstellende***. 彼は（hij）回復に向かっている（is（英 is）herstellende←herstellen 回復する） （Ten Cate et al. 2013[2]: 141）

(2) オ Wij ***zijn*** nog steeds ***zoekende***. 私たちは（wij）まだずっと（nog steeds）探している（zijn（英 are）～zoekende←zoeken 探す） （ib. 141）

(3) オ De belangstelling voor dit boek ***is*** nog steeds ***groeiende***. この本（dit boek）への（voor）関心は（de belangstelling）まだ相変わらず（nog steeds）増大しつつある（is（英 is）～groeiende←groeien 増大する） （ib. 141）

オランダ語の現在分詞は「語幹＋-ende」よりも「語幹＋-end」が普通だが，ここでは中期オランダ語の -ende と同じ語形である。しかし，類例はわずかで（オ doende zijn 行っている（met ～を）←doen 行う，gaande zijn 起こっている←gaan 進行する，*ANS* 1997[2]: 107），進行形としては十分に発達していない。

一方，次例の「形容詞化した現在分詞 -end＋zijn（英 be）」は，時間的制限とは無縁の状態を表し，もとの動詞の意味から逸脱していることもある。この zijn は進行形の助動詞ではなく，「～である」の意味の連結動詞（コピュラ copula）にすぎない。英語の対応表現やドイツ語の「形容詞化した現在分詞＋sein」も同様である。

(4)　英 The movie ***was*** very ***shocking/exciting***.（←shock, excite）
(5)　オ De film ***was*** erg ***schokkend/spannend***. 同上（←schokken, spannen）
(6)　ド Der Film ***war*** sehr s***chokkierend/spannend***. 同上（←schokkieren, spannen）

英語の現在分詞の語尾 -ing は，(1)～(3)のオランダ語に似た古英 -ende/-inde だった。語末音 -e の脱落と同化（-n＜-nd）を受けて，-ing と区別がつかなくなり，中英語期には，ド -ung に相当する名詞派生接尾辞を動名詞に転用した -ing に落ち着いたのである（安井/久保田 2014: 192）。古英語は進行形が未発達で，当時の「bēon/wesan（英 be）＋現在分詞 -ende/-inde」構文は，稀に自動詞に使う程度だった。動詞の形容詞的語形だった現在分詞は，(4)～(6)の永続的状態の意味が基本で(7)，動詞の意味に応じて一時的な出来事も表した(8)。オランダ語の(5)と(1)～(3)は両者の混在を暗示しているようである。

(7)　古英 Hīe ***wǽron huntende***.（直訳：英 They were hunting.）彼らは猟師だった（職業として猟師をしていた）　（橋本 2005: 151 変更）
(8)　古英 Hīe ***wǽron wuniende on þǽ****re byrig*.（英 They were living in the city.）彼らはその町に住んでいた
（保坂 2014: 103 変更，橋本 2005: 151 変更）

英語では，このあいまいさを解消するべく，進行形への補助手段とも言うべき構文が加わった。それが(9)「bēon/wesan＋前置詞 on/in＋動名詞 -ing」（～している最中にある）である。

(9)　古英 Hīe ***wǽron on/in hunting***.（英 They were on hunting/in the course of hunting.）彼らは猟をしている最中だった
（橋本 2005: 152 変更）

古英語の動名詞 -ing は基本的に名詞なので，前置詞に支配されたのは自然で，(9)は一時性の表現に適した構文だった。on/in は場所「～している所」から時間の意味になり，動名詞は現在分詞に転じて動詞的性質を帯びたのである。前置詞 on/in は a [ə] に弱化し，「be＋a-V-ing」構文として 16/17 世紀に頻用され，20 世紀初めまで生き延びた（初近英 Whither ***were*** you ***a-going***？どこへ行こうとしていたのですか，Shakespeare: *Henry VIII*, 1. 3. 50, 中尾/児馬 1997[3]: 119, 123）。今では，英 ***a***live/***a***sleep（＜古英 on līfe/on slǣpe）の a- [ə] に残るにすぎない。

このように，英語の進行形は，「bēon/wesan＋前置詞 on/in＋動名詞 -ing」構文との混交によって，英 be が一時的意味を強め，連結動詞（コピュラ）「～である」から助動詞「～の最中だ」へと文法化した結果として捉えられる（保坂 2014: 109）。

近年の英語では，18/19 世紀に増えた「be being＋形容詞/名詞」も頻出する（英 She ***was being polite/a fool***. 彼女はそのときだけ礼儀正しく/愚か者のように振る舞った，橋本 2005: 155, 中尾/児馬 1997[3]: 124）。英 i***'m lovin'*** it は，一時的な心の衝動を巧みについた斬新なフレーズと言える。しかし，英 i***'m lovin'*** you！などとプロポーズしようものなら，平手打ちを食らうのは目に見えている。

2．前置詞句進行形

2-1. ゲルマン諸語の前置詞句進行形―「前置詞＋定冠詞」から不定詞標識へ

オランダ語で(1)～(3)に代わって 17 世紀に用法を広げたのは，「オ aan het [a·nt] (←[a·n ət]) ＋不定詞＋zijn（英 be）」（～している）構文だった（Van Pottelberge 2004: 117, 130; Booij 2010: 149）。これは，英 on/ド an にあたる前置詞のオ aan [a·n] に定冠詞中性単数形 het [ət]（英 the）を添えた構文である。

(10) オ Zij ***speelt piano***. 彼女は（zij）ピアノを（piano）演奏する/演奏し

ている（speelt←spelen）

（以下，「～している」は進行中の意味を表す）

（11） オ Zij is ***piano*** aan het ***spelen***. 彼女はピアノを演奏している

（12） オ Zij is aan het [***piano spelen***]. 同上

（13） オ Zij is {***klassieke piano*** aan het ***spelen***/*aan het [***klassieke piano spelen***]. 彼女はクラシックピアノを演奏している（Booij 2010: 103）

（14） オ *Zij [***piano speelt***]. 彼女はピアノを演奏する/している（piano spelen）

「オ aan het＋不定詞＋zijn」構文は進行中の意味を明示するが(11)，単純形でも進行中の出来事は表すことができる(10)。オランダ語では，英語に比べて進行形としての文法化が不十分で，「準進行形」（quasi-progressive）にとどまるのである。zijn（英 be）は枠構造に従って主節の第２位（左枠）に移動し，文末（右枠）に「aan het＋不定詞」が残される。

オランダ語では，(12)のように，aan het（直訳：英 on the/ド am）の直後に piano spelen「ピアノを演奏する」を OV 型（目的語＋動詞）の基本語順でまとめることもできる。これは「名詞＋動詞」型の１語の抱合動詞への自動詞化に相当する。その証拠に，(13)のように，名詞 piano は名詞句 klassieke piano「クラシックピアノを」に置き換えらない。ただし，(14)*Zij [piano speelt]$_V$.「彼女はピアノを演奏する/している」とは言えず，定形（現在形）では piano を speelt に抱合できない。つまり，正規の名詞抱合に準じた「準名詞抱合」（quasi-noun incorporation, Dahl（2004）の用語）なのである（Booij 2010: 94–117）[2]。

一方，名詞抱合が生産的な西フリジア語は，対応する「西ｱ oan 't [oənt]＋不定詞（＝第２不定詞）＋wêze（英 be）」構文（西ｱ oan 't＝オ aan het）を備

[2] Booij（2010: 115–117）は，日本語の「山登りする」も「～する」だけに可能な準名詞抱合としている。[電話をする]$_{VP}$ に対して，[電話する]$_V$ とは言えるが，[電話をかける]$_{VP}$ は*[電話かける]$_V$ にはならないからである。

えているだけでなく，抱合動詞 pianospylje「ピアノを弾く」も定形で使うことができる。

(15)　西フ Hja ***spilet piano***. 彼女は（hja）ピアノを演奏する/演奏している（spilet 現在形←spylje）
Hja is ***piano*** oan't ***spyljen***. 彼女はピアノを演奏している（is 現在形←wêze）

(16)　西フ Hja is oan't ***pianospyljen***. 彼女はピアノを演奏している（pianospyljen 第 2 不定詞←pianospylje）
Hja ***pianospilet***. 彼女はピアノを演奏する/している（pianospilet 現在形←pianospylje）

(12)オ aan het piano spelen と(16)西フ oan 't pianospyljen の不定詞は，正規の複合名詞とは異なり，動詞的性質を備えている。そこで，オ *aan het spelen van（de）piano, 西フ *oan 't spyljen fan（'e）piano（直訳：英 on the playing of（the）piano）という体言化はできない。動名詞に名詞的性質が強かった初期近代英語の「a（＜on）＋動名詞＋of＋名詞句」構文(17)とは，異なるのである。

(17)　初近英 The enemy was ***a plundering of the country ayde***. 敵は国の助成金を奪っている最中だった（1644 年頃）（橋本 2005: 153）

さて，ここで 1 つ問題がある。(11)オ Zij is ***piano*** aan het ***spelen***.「彼女はピアノを演奏している」に注目されたい。オ aan het は語形的に英 on the にあたるので，spelen「演奏する」（英 play）は名詞化されているはずである。それなのに，piano「ピアノを」を目的語として支配できるのは，なぜだろうか。それは，aan het [aːnt]（←[aːn ət]）がその発音が示唆するように，1 語の音韻論的語（phonological word）になって，「前置詞＋定冠詞」（英 on the）から「不定詞標識」（infinitive marker, 英 to）に再分析されているからであ

る。(15)(16)「西フ oan 't＋第 2 不定詞＋wêze」構文の oan 't [oənt]（←oan it [oən ət]）もそうである。英 ***to*** go ***to*** school/ド ***zu***r Schule ***zu*** gehen に見られる ***to*** go/***zu*** gehen の to/zu は，元来，***to*** school/***zu***r Schule の前置詞 to/zu と同類であり，そこから不定詞標識に文法化した事実を想起されたい。

ドイツ語も話し言葉では，「ド am＋不定詞＋sein（英 be)」構文（ド am ←an dem, 英 on the）を使う。ただし，進行形としては初期の段階にある。

(18) ド Sie ***spielt Klavier***. 彼女はピアノを演奏する/している
↔*Sie ist ***Klavier*** am ***Spielen***. 彼女はピアノを演奏している

(19) ド Sie ist am ***Klavierspielen***. 彼女はピアノを演奏している
↔*Sie [***Klavier spielt***]. 彼女はピアノを演奏する/している(Klavier spielen)

(20) ド Sie ist（gerade）dabei, ***Klavier*** zu ***spielen***. 彼女はピアノを演奏している

(21) ド ??Sie ist dabei zu ***spielen/kochen/lesen***. 彼女は演奏して/料理して/読んでいる　（Ebert 1996: 48, Ebert/Hoekstra 1996: 97 変更）

ド am（←an dem）は「前置詞＋定冠詞」の連続にとどまり，Spielen「弾く」は中性名詞の扱いを受け，動詞的性質が希薄なので，目的語 Klavier「ピアノを」を支配できない(18)。それでも目的語を伴わないド Sie ist ***am Klavierspielen***.「彼女はピアノ演奏（Klavierspielen）の状態に（am）ある(ist)」は OK なので(19),「am-進行形」（ド *am*-Progressiv）と呼んでいる（Van Pottelberge 2004: 179–246)。目的語をつけたいなら，「ド（gerade）dabei sein（英 be (just) thereby)＋目的語＋zu-不定詞」構文を用いる(20)。逆に，目的語なしでは不自然になる(21)。この構文の用法は次の「beim＋不定詞＋sein」構文と同じく，意図的に行う動作主性（agentivity）が高い動詞に限られている。

ドイツ語には，上記のド an のほかにも，動作主性がとくに高く，場所の意味をとどめる beim（←bei dem, 英 by the)，少数の非動作主動詞（non-

agentive verb）に限られる im（←in dem, 英 in the）もある。ともに使用範囲は am よりも狭くなる。

(22) ド Um 6 Uhr war ich noch {***am/beim***} ***Schwimmen***. 6 時には私はまだ水泳をしていた（am Schwimmen 泳いでいた↔ beim Schwimmen 水中から出てプールサイドにいたり，着替えていても可）
（Ebert 1996: 47）

(23) ド Anna ist {***am/*beim***} ***Schlafen***. アンナは眠っている （ib. 46）

(24) ド Das Wasser ist {***am/*beim***} ***Kochen***. お湯が沸いている （ib. 46）

(25) ド Die Preise sind {***im/am/*beim***} ***Steigen***. 物価が上がっている
（ib. 48）

ただし，代名詞目的語(26)なら可能とし，(27)のような進行中の状況では単純形を不自然とする判定もあり，文法化への萌芽も見て取れる。

(26) ド {***Das/*Das Problem***} sind wir noch ***am Diskutieren***. {それ/その問題を} 私たちはまだ議論しているところだ
（Ebert/Hoekstra 1996: 98 変更）

(27) ド Als ich ins Zimmer trat, {***waren*** sie ***am Diskutieren/??diskutierten*** sie}. 私が部屋に入ると，彼らは議論をしている最中だった[3]

とは言っても，瞬間的な達成を表す動詞では，とくに過去形で単純形とは明確な意味の差が生じる。am-進行形には独自の役目があると言える。

(28) ド Er ***starb/schlief ein***. 彼は亡くなった/寝入った（sterben/eins-

[3] 後述する西フリジア語でも同様の判定がある（西フ Doe't er deryn kaam, {***wie*** se ***oan 't skriuwen/??skreau*** se}. 彼が（er）中へ（deryn）入る（kaam）と（doe't）彼女は（se）書き物をしていた（wie〜oan't skriuwen/skreau 過去形←skriuwe, Ebert/Hoekstra 1996: 82）

chlafen）

（29） ド Er ***war am Sterben/Einschlafen***. 彼は臨終の床にあった/眠りかけていた

なお，オランダ語に近いライン地方（ド Rheinland）の方言には，不定詞が名詞句目的語を支配する上記のオランダ語の進行形の形式に似た「ライン進行形」（ド rheinische Verlaufsform）がある（Bhatt/Schmidt 1993）。

上記の前置詞句を含む進行形を「前置詞句進行形」（prepositional progressive）と言う。類例は，フリジア語群（西フ oan 't＋第 2 不定詞＋wêze, フェリ uun 't＋不定詞＋wees, モ bai tu/bai än（英 by to/by and）＋不定詞＋weese[4]），低地ドイツ語（ザ an 't/bi to/bi un＋不定詞＋sien/wesen/ween），アフリカーンス語（aan die＋不定詞＋wees），ペンシルヴェニアドイツ語（am＋不定詞＋sei），スイスドイツ語（チュ am＋不定詞＋sii）など西ゲルマン語に広く見られる（Van Pottelberge 2004: 247–318, Ebert/Hoekstra 1996: 94, Ebert 2000: 638–645）。

北ゲルマン語についても，アイスランド語には「vera（英 be）＋að（英 at＞to）-不定詞」構文(30)(31)，デンマーク語には「være（英 be）＋ved at（英 by at＞to）-不定詞」構文(32)(33)がある。

（30） ア Hún ***spilar á píanó***. 彼女は（hún）ピアノを（á píanó, 直訳：英 on piano）演奏する（spilar 現在形←spila）

（31） ア Hún er að ***spila á píanó***. 彼女はピアノを演奏している（er 現在形, 英 is（←vera）＋að（英 at＞to）＋spila 不定詞）

（32） デ Hun ***spiller klaver***. 彼女は（hun）ピアノを（klaver）演奏する/している（spiller 現在形←spille）

[4] 北フリジア語モーリング方言の構文は低地ドイツ語北低地ザクセン方言（bi to/bi un＋不定詞＋sien 等）と同様に，デンマーク語（være ved at [ɔ]（＝og [ɔ], 英 and）-不定詞）からの借用と考えられる（Ebert/Hoekstra 1996: 95）。

(33) デ Hun er ved at ***spille klaver***. 彼女はピアノを演奏している（er 現在形，英 is（←vera）＋ved at（英 by at＞to）＋spille 不定詞）

アイスランド語は単純形とアスペクトの対立を示し，目的語も伴うので，文法化が進んでいる。ただし，意図的な動作を表す動作主動詞（agentive verb）に限られ，動態性（dynamicity）の低い動詞，状態動詞，天候動詞には使えない。それでも，感情的な強調表現では許されるなど，微妙である（Thráinsson 2007: 13–15, Kress 1982: 159–152, Einarsson 1949[2]: 143–145）。VO 型の両言語では，準名詞抱合（[名詞＋動詞]$_V$）は起こらない。

アイスランド語は少数の動詞で「vera（英 be）＋現在分詞」による進行形表現も残しており，1．と 2．で述べたオランダ語や以前の英語との共通点も示す。

(34) ア Hann ***er*** {***sofandi/vakandi/alltaf borðandi***}. 彼は（hann）眠っている/起きている/いつも（alltaf）食べている（sofa/vaka/borða 眠る/起きている/食べる，*Hann ***er borðandi***. は不可）
（Thráinsson 2007: 14f., Kress 1982: 162）

2–2. オランダ語と西フリジア語の準抱合

オランダ語では，準名詞抱合としての「オ aan het＋[名詞＋不定詞]」以外に，「準不変化詞抱合」（quasi-particle incorporation）も可能である。まとめて「準抱合」（quasi-incorporation）と呼ぶことにしよう。比較のために，次例のドイツ語を参照されたい。

(35) ド Sie ***ruft*** ihren Freund ***an***. 彼女は恋人に電話する/している
(36) ド Sie ist {*ihren Freund/Ø} am ***Anrufen***. 彼女は恋人に電話している（Ø は目的語 ihren Freund「恋人に」を伴わない場合）
(37) ド *Sie ist {ihren Freund/Ø} ***an*** am ***Rufen***. 同上

(35)のように，不変化詞動詞（分離動詞）のド an|rufen「電話する」は，OV 型の基本語順と枠構造に従って，定形でド Sie ruft～an.「彼女は電話する/している」となる。進行形の文法化が初期段階のドイツ語では，上述のように，「ド am＋不定詞」には動詞的性質が希薄である。そのため，(36)のように目的語 ihren Freund「恋人に」を支配できず，ド Sie ist am ***Anrufen***.「彼女は電話している」としか言えない。(37)のように動詞 rufen だけを am Rufen とすると，不変化詞 an との関係が断たれ，目的語なしでも許されなくなる。

次に，やはり OV 型の基本語順と枠構造を有するオランダ語では，不変化詞動詞（不変化詞動詞）のオ op|bellen「電話する」は，(38)のように，オ Zij belt～op.「彼女は電話する」となる。準進行形に発達したオランダ語では，目的語 haar vriend「恋人を」を支配できる。その際，(39)のように「不変化詞＋動詞」にまとめた aan het ***opbellen*** も可能で，これが準不変化詞抱合である。同じく（39)に挙げた ***op*** aan het ***bellen*** よりも普通だが（Booij 2010: 134），これは「不変化詞＋動詞」の結びつきが緊密で，目的語よりも動詞との関係が強いためである。

(38)　オ Zij ***belt*** haar vriend ***op***. 彼女は恋人に（haar vriend）電話する/している（belt～op←op|bellen 電話する）

(39)　オ Zij is haar vriend {***op*** aan het ***bellen***/aan het ***opbellen***}.　彼女は恋人に電話している

ところが，(40)(41)の「ド versuchen＋zu-不定詞句/オ proberen＋te-不定詞句」（～しようとする）では，ド *zu ***anrufen***/オ *te ***opbellen*** は両言語ともに許されない。

(40)　ド Sie versucht ihren Freund {***an***zu***rufen***/*zu ***aurufen***}. 彼女は彼女の恋人に電話しようとする（「～している」の意味にもなる，以下略）

(41)　オ Zij probeert haar vriend {***op*** te ***bellen***/*te ***opbellen***}. 同上

ド ***an***zu***rufen*** の続け書きとオ ***op*** te ***bellen*** の分かち書きは，単なる正書法上の便宜による相異にすぎない。つまり，「オ aan het＋不定詞」の aan het は名詞句を支配した前置詞の面影をとどめており，動詞部分の直前に付加される不定詞標識への発達が進んだ「オ te-不定詞」の te とは異質なのである。それに伴って，不定詞の性質も異なり，「オ aan het＋不定詞」では「オ te-不定詞」よりも不定詞の名詞的性質が強いために，上記の両言語の相異が生じることになる。

一方，西フリジア語では，「西フ besykje＋te-第 2 不定詞句」（～しようとする）も同じく「不変化詞＋te-第 2 不定詞」（西フ ***op*** te ***iten*** 平らげる←第 1 不定詞 op|ite, 英 eat up/ド auf|essen）となる(42)。しかし，前置詞句進行形では，オランダ語(39)と違って不変化詞抱合が義務的である（西フ oan 't ***opiten***, (43)）。これは，西フ oan 't がオ aan het よりもさらに前置詞的性質が強いためである。西フ oan 't［op|iten］の第 2 不定詞 op|iten「平らげる」（英 eating up）は，目的語 in hjerring「ニシンを」を支配しつつも，名詞的性質を帯びており，op|iten 全体で不定詞標識 oan 't に支配される。前置詞的性質を弱めた不定詞標識 te が op［te iten］のように，動詞 ite「食べる」だけを支配するのとは異なるのである。

(42)　西フ Hy besiket in hjerring {***op*** te ***iten***/*te ***opiten***}. 彼は（hy）ニシンを（in hjerring）平らげ（op te iten←op|ite）ようとする（besiket←besykje ～しようとする）

(43)　西フ Hy is in hjerring {*__op__ oan 't ***iten***/oan 't ***opiten***}. 彼はニシンを平らげている（is～oan 't opiten）　（Hoekstra/Ebert 1996: 83）

2–3. 前置詞句進行形と構文慣用句

オランダ語と西フリジア語の前置詞句進行形では，被抱合名詞が複数形（-en）に似た語形（-e）になることがある。進行形の発達が初期段階のドイツ

語も同様である。

（44） オ Hij is {***een oud boek*** aan het ***lezen***/aan het ***boeken lezen***}. 彼は（hij）古い本を（een oud boek）読んでいる（is～aan het lezen）/本を読んでいる（is aan het boeken lezen）（boek 単数形↔ boeken 複数形）

（45） 西フ Hy is {***in âld boek*** oan 't ***lêzen***/oan 't ***boekelêzen***}. 同上（boek 単数形↔ boeke-: boeken 複数形）

（46） ド Er ist am ***Bücherlesen***. 同上（Buch 単数形↔ Bücher 複数形）

（47） オ Hij is {***een lange brief*** aan het ***schrijven***/aan het ***brieven schrijven***}. 彼は長い手紙を（een lange brief）書いている（is～aan het schrijven）/手紙を書いている（is aan het brieven schrijven）（brief 単数形↔ brieven 複数形）

（48） 西フ Hy is {***in lang(e) brief*** oan 't ***skriuwen***/oan 't ***brieveskriuwen***}. 同上（brief 単数形↔ brieve-: brieven 複数形）

（49） ド Er ist {**einen langen Brief* am Schreiben/am ***Briefeschreiben***}. 同上（Brief 単数形↔ Briefe 複数形）

（44）～（46）と（47）～（49）の 2 組では，左側が「名詞句～不定詞」による動詞句表現，右側が「名詞＋動詞」による準名詞抱合（ドイツ語は複合名詞に近い）である。その際，（44）（46）の右側のオ aan het ***boeken*** lezen/ド am ***Bücher***lesen「本＋読む」は，オ boek/ド Buch「本」の複数形にあたるオ boeken/ド Bücher と同形になる。一方，（45）西フ oan 't ***boeke***lêzen の boeke- は複数形 boeken（←boek）に似ているが，完全には一致しない。これに対して，複合語では 3 言語に共通して，オ ***boeken***rek/ド ***Bücher***regal/西フ ***boeke***rak, ***boeke***rek「本棚」となる。（47）オ aan het ***brieven*** schrijven「手紙＋書く」と ***brieven***bus「郵便ポスト」（オ brieven 複数形←brief），（48）西フ oan 't ***brieve***skriuwen と ***brieve***bus「同左（brieve-: brieven 複数形）」の関係も同じである。つまり，ドイツ語で ***Kinder***garten「幼稚園」（←Kind 子供

―複数形 Kinder）と並んで，1 人乗りでも ***Kinder***wagen「乳母車」と言うように，オ -en-/西フ -e- は複合語の連結要素に対応すると言える。

そもそも名詞抱合は抱合名詞の個別性を捨象した表現なので，どんな本や手紙かは問わず，何冊も本を読んだり，何通も手紙を書く必要はない。これは準名詞抱合でも同様である。しかし，たとえばドイツ語では，(49) am ***Briefe***schreiben「手紙＋書く」と ***Brief***kasten「郵便ポスト」は一致せず，複数形と同形の Birefe- が前半部の複合語は存在しない。それでも，1 通しか入らない郵便ポストなどあり得ず，何通であっても，手紙を書いている点は同じである。抱合名詞は，原則として複合語の成分と同様に，数に関して中立なのである[5]。

大まかに言えば，動詞句表現（オ ***een oud boek*** aan het ***lezen***, ***een lange brief*** aan het ***schrijven***）と準抱合（オ aan het ***boekenlezen***, aan het ***brievenschrijven***）は，「花を見る」と「花見する」の関係に似ている。「花を見る」に比べて，「花見する」は桜や梅を連想し，季節は春だろう。「花見」という複合語の持つ伝統的慣習の意味が生きているのである。そこで，「お花見する」，「お花見」という「お」を添えた表現が可能になる。類例は，近代日本の形成に大きな影響を与えた欧米主要国の呼び名にも見られる。文化的洗練に対する敬意と軽い皮肉を込めた「おフランス」は定着しているが，「*おドイツ」，「*おイギリス」，「*おアメリカ」などと，むやみに乱発はできない。上例に挙げたカッコ内のオランダ語の準抱合は，単に「本を読む/手紙を書く」ではなく，「本読み（＝読書）する/手紙書きする」という典型的動作を指し，伝統的慣習や社会制度的な営みに連なる定形表現として，特有の語形を取っているのである。これは西フリジア語についても同様と考えられる。日本語でも，複合語や「～する」の表現は，やたらに即席造語はできないことがある。「(お) 花見 (する)」/「(お) 月見 (する)」は良くても，「*(お)

[5] 保守派層話者のペンジルヴェニアドイツ語では，ar ɪs ***am/n sai bʊgi fɪksə***「彼は（ar）彼のバギーを（sai bʊgi）修理している（ɪs am/n～fɪksə）」のように，am/n（英 on the）に「目的語名詞句＋不定詞（sai bʊgi fɪksə）」が後続する（Van Ness 1994: 435）。スイスドイツ語チューリヒ方言にも類例がある（Ebert 2000: 611）。

虫見（する）」/「*（お）火星見（する）」は，世の中がよほど大変革しない限り，無理なのである。

ただし，名詞抱合の生産性が高い西フリジア語では，散発的動作としか言えない(50)も，正規の抱合による抱合動詞として定形では使えないものの，準抱合による不定形は可能で，被抱合名詞は単数形のままである。典型的な作業を表す(51)のような例では，さらに「名詞＋前置詞句＋動詞」も許される。

(50) 西フ Hy is {***in waskmasine*** oan 't ***keapjen***/oan 't ***waskmasinekeapjen***}. 彼は（hy）洗濯機を（in waskmasine）買っている（is〜oan 't keapjen）

(51) 西フ Hy is {***boeken op it rim*** oan 't ***setten***/oan 't ***boeken op it rim setten***}. 彼は書籍配架している（＝本を（boeken）書棚に（op it rim）置いている（is〜oan 't setten）（Hoekstra/Ebert 1996: 83）

それでは，オ piano spelen「ピアノ＋演奏する」はどうだろうか。否定文に変えて，オ boeken lezen「本を（boeken 複数形←boek）読む」と比較してみよう。否定冠詞 geen＋名詞（英 no/ド kein＋名詞）と否定詞 niet（英 not/ド nicht）について，主節(52)(53)と従属節(54)(55)の違いに注目されたい。

(52) オ Ik weet dat zij {[geen ***boeken***] ***leest***/*niet [***boeken leest***]}. 私は（ik）彼女が（zij）本を読まない（geen boeken（英 no books）leest（英 rads)/niet（英 not）boeken leest）ことを（dat）知っている（weet）

(53) オ Zij ***leest***$_i$ {[geen ***boeken***] ____$_i$/*niet [***boeken*** ____$_i$]}. 彼女は本を読まない

(54) オ Ik weet dat zij {**[**geen ***piano***] ***speelt***/niet **[*piano speelt*]**}. 私は彼女がピアノを演奏しない（geen piano（英 no piano）speelt（英 plays)/niet（英 not）piano speelt）ことを（dat）知っている（weet）

(55)　オ Zij ***speelt***$_i$ {[geen ***piano***] _____$_i$/*niet [***piano*** _____$_i$]}. 彼女はピアノを演奏しない (Booij 2010: 104)

(52)(53)のように，オ boeken lezen「本を読む」では，boeken「本」を否定した [geen ***boeken***] ***lezen*** は主節・従属節ともに OK だが，boeken lezen 全体を否定した niet [***boeken lezen***] は不可である。それは普通の動詞句にすぎないためである。同じく(54)(55)のように，オ piano spelen「ピアノを演奏する」では，piano「ピアノ」を否定した [geen ***piano***] ***spelen*** は主節・従属節ともに問題ない。ところが，piano spelen 全体を否定した niet では，speelt が移動して piano が残った*$\boldsymbol{speelt}_i$ niet [***piano*** _____$_i$] は非文だが，OV 型の基本語順に沿った従属節の niet [***piano speelt***] は許される。つまり，オ piano spelen は単なる動詞句「ピアノを演奏する」を越えて，ときには「ピアノ演奏する」という「複合述語」(complex idiom) のまとまりを作るのである。Booij (2010) は，この種の現象を「構文慣用句」(constructional idiom, Booij 2010: 13) の概念から体系的に捉えようとしている。そこまでには至らないオ boeken lezen「本を読む」/brieven schrijven「手紙を書く」も，西フリジア語やドイツ語の対応表現と同じく，前置詞句進行形では社会的慣習を反映した典型的動作として，１つのまとまりを作ることが確認できる。

オ piano spelen は，piano が外来語だから連結要素がつかないとか，腕は２本しかないから何台も弾けないので単数形だというのではなく，このままで十分なのである。英 play the piano に定冠詞がつくのも，YAMAHA に限るとか，Steinway か Bösendorfer か，などということとは無関係である。ただし，ドイツ語では，(54)(55)にあたる表現も可能である（ド Ich weiß dass sie ***kein/nicht*** Klavier spielt. / Sie spielt ***kein/nicht*** Klavier.)。ド Klavier speieln のまとまりは，オ piano spelen よりも強いと言える。構文的慣用句の程度には，言語内部にとどまらず，言語間でも微妙な差が認められると言える。

さらに，2-2. で検討した不変化詞動詞（分離動詞）の準抱合に加えて，「機能動詞構文」（ド Funktionsverbgefüge, 例：eine Entscheidung treffen 決定

する（entscheiden），in Erscheinung treten 現れる（erscheinen））を考慮に入れてみよう。動詞句のまとまりは，「通常の動詞句＞構文的慣用句＞機能動詞構文＞不変化詞動詞」の順に強まる様子がうかがえる。

英語を含む上述のゲルマン諸語は，前置詞句進行形というルーツを共有している。その際，前置詞が消失し，動名詞が現在分詞として十分な動詞的性質を獲得した英語に対して，オランダ語とその関連言語は前置詞を保持し，定冠詞との一体化で不定詞標識への文法化を図った。その段階は，本節で扱った 3 言語に限ると，「オランダ語＞西フリジア語＞ドイツ語」の順に位置づけられる。

3．姿勢動詞進行形

3-1．従属型姿勢動詞進行形―進行形の 2 つの型

現代ゲルマン諸語には進行形に準じた種々の構文があるが，その代表には，上述の前置詞句進行形と並んで，次に述べる「姿勢動詞進行形」（posture/postural verb progressive）が挙げられる（Ebert 2000: 607）[6]。「姿勢動詞」（posture/postural verb）とは，人間の姿勢（座・立・臥・歩）を表す状態動詞で，「（物が）掛かっている」も含まれる。英語では sit/stand/lie/walk/hang，ドイツ語では sitzen/stehen/liegen/laufen/hängen だが，ともにそれを助動詞に用いた進行形構文は未発達である[7]。

一方，オランダ語（zitten/staan/liggen/lopen/hangen）と西フリジア語（sitte/stean/lizze/rinne/hingje）では，「姿勢動詞＋オ/西フ te（英 to/ド zu）-不定詞」型の従属型構文が発達している（西フリジア語は「姿勢動詞～te- 第

[6] 本稿では割愛するが，スウェーデン語の「hålla på att＋不定詞」（～している，英 hold (up)on to＋不定詞）も「～しつつある，～しそうだ」の意味を表す点で前置詞句進行形と似ている（(72)参照，Ebert 2000: 621, 清水/ラーション/當野 2016: 144）。

[7] ただし，オランダの英語学者ヴィセル（Fredericus Theodorus Visser 1886～1976）は，英語ではどの時代にも，英 he ***sat*** **(*a*** **(＜*on/in*)) *-talking***; he ***sat and talked*** という 2 つの構文（従属型/並列型）が例証されると述べている（Visser 1969 (1978 Reprint): 1402）。

2不定詞」)[8]。語彙的意味の中心はte-不定詞にあり，姿勢動詞は進行アスペクトを表示する（～している＜～しながらすわっている，など)。姿勢動詞の語彙的意味の反映が希薄な例も多く，文法化が進んでいると言える（オ{***Loop/lig/zit***} niet ***te zeuren***！文句を言ってるな（←lopen/liggen/zitten), Ebert 2000: 628)。

この2つの構文には，次の大まかな相違がある（Ebert 2000: 623)。

(56)

	前置詞句進行形		姿勢動詞進行形
① 主語の姿勢との関連	±	⟷	+
② 動作主性	+	⟷	±
③ 完結性（telicity）	+	⟷	−
④ 動態性	+	⟷	−
⑤ 継続性	−	⟷	+

西フリジア語の姿勢動詞進行形は，前置詞句進行形と違って，非動作主動詞や動態性が低い動詞でも可能で(57)，命令文（好ましくない行為）にも現れ(58)，継続時間を表す副詞句と共起し(59)，習慣・反復も表す(60)。一方，オランダ語では，ドイツ語(24)(25)と同様に，上記の②動作主性の傾向が前置詞進行形で弱く，動作主性や動態性の低い動詞も使える(57)。

(57) 動作主性/動態性の低い動詞：前置詞句進行形 ×↔姿勢動詞進行形 ○

西フ *It wetter ***is oan 't sieden***. お湯が（it wetter）沸いている（is, 英 is; siede 沸く）

↔It wetter ***stiet te sieden***. 同上（stiet←stean, 英 stand）

*De bern ***binne oan 't sliepen***. 子供たちは（de bern）眠っている（binne, 英 are; sliepe 眠る）

[8] オ lopen/西フ rinne「歩く」は他言語の対応語を含めて，軽蔑的な含意を伴うことが多い。

↔De bern ***lizze te sliepen***. 同上（lizze, 英 lie）
（以上 Ebert/Hoekstra 1996: 82–84）

比較：オ Het water is ***aan het koken***. お湯が（het water）沸いている（is, 英 is; koken） （Ten Cate et al. 2013[2]: 135, Ebert 1996: 51）
Hij is ***aan het sterven***. 彼は死にかかっている（sterven 死ぬ）
（Ebert 1996: 51）

(58) 命令文：前置詞句進行形 ×↔姿勢動詞進行形 ○
西フ *Wees net ***oan 't seuren***！ 文句を言ってるな（wees. 英 be; seure 文句を言う）
↔***Sit*** net ***te seuren***！ 同上（sit←sitte, 英 sit; net, 英 not）
（Ebert/Hoekstra 1996: 90）

(59) 継続時間を表す副詞句：前置詞句進行形 ×↔姿勢動詞進行形 ○
西フ *Hja ***wie*** twa oeren lang allinne ***oan 't boartsjen***. 彼女は（hja）2 時間（twa oeren lang）1 人で（allinne）遊んでいた（wie, 英 was; boartsje 遊ぶ）
↔Hja ***siet*** twa oeren lang allinne ***te boartsjen***. 同上（siet 過去形←sitte, 英 sit） （ib. 90）

(60) 習慣・反復：前置詞句進行形 ×↔姿勢動詞進行形 ○
西フ Hy ***wie oan 't biddeljen***. 彼は（hy）物乞いしていた（進行の意味のみ可，biddelje 物乞いする） （ib. 90）
↔Hy ***rûn te biddeljen***. 彼は物乞いしていた（進行）/以前はよく物乞いしたものだ（習慣・反復，rûn 過去形←rinne, 英 walk）
（ib. 90）

北ゲルマン語の前置詞句進行形は，姿勢動詞進行形（並列型，3-3. 参照）と違って，「～している」以外に開始「～しつつある，～しそうだ」の意味を表すことがある。これは姿勢動詞進行形と⑤継続性(61)，前置詞句進行形と③完結性(62)(63)の関係に合致している。次例はデンマーク語の前置詞句進行形「være ved at-不定詞」（英 be by at（＞to)-不定詞）だが，英 by にあた

るデ ved に「〜する方向/そばにある」の意味が反映していると言える。

(61) デ Vandet ***står og koger***. お湯が（vandet）沸いている（姿勢動詞進行形：沸騰した状態が続いている，står←stå, 英 stand; og koger, 英 and boils）

(62) デ Vandet ***er ved at koge***. お湯が沸きつつある（前置詞句進行形：er ved at koge, 英 is by at（＞to）boil） （Ebert 2000: 621, 1996: 58）

(63) デ Jeg ***er ved at dø*** af kulde. 私は（jeg）寒くて（af kulde）今にも死にそうだ（er ved at dø, 英 is by at（＞to）die）

（新谷/Pedersen/大辺 2014: 166）

3-2. 並列型姿勢動詞進行形（1)―英語とドイツ語の疑似並列と仮装不定形

姿勢動詞進行形には，「従属型」（姿勢動詞＋[不定詞標識＋V]）のほかに，(61)のような「並列型」（姿勢動詞＋[並列（＝等位）接続詞（英 and）＋V]）がある。従属型では，前置詞が文法化した不定詞標識（オ te/西ｱ te, 英 to）つきの不定詞句が姿勢動詞に従属し，並列型では，順接の並列接続詞に動詞句が後続する。

並列型姿勢動詞進行形の「〈姿勢動詞〉し，V している」という並列の原義は，「V しながら〈姿勢動詞〉している」という従属的意味を帯び，進行形「V している」に連なる。しかし，このプロセスは文法化を伴うとは限らない。並列接続「英 A and B」は多義的であり，両者を一体と捉（とら）えた従属的意味「B への A」も表す。たとえば，英 [bread] and [butter]「バターつきのパン」は bread [with butter] のことで，ドイツ語の Butterbrot に対応する。次例も同様である。

(64) 英 Don't ***stand*** at my grave ***and weep***. 私のお墓の前で（＝お墓の前に立って）泣かないでください

あの感動的な『千の風になって』の原典とされる英詩の冒頭である。don't

が実質的に否定しているのは weep であり，この文は「泣いて（立って）いないでください」の意味である。「立っていないで，すわってください」とか，「邪魔だからどいてください」ということではない。姿勢動詞進行形を欠く英語にも，類例は認められるのである。

ドイツ語も英語と似ており，次例は並列の域を超えた表現である。

（65） ド Schäme dich ***und rede nicht so*** (= ***so zu reden***)! そんな言い方をすることに恥を知りなさい （村上 2003: 19）

（66） ド Wollt Ihr so gütig gegen mich sein ***und ihn besuchen und trösten***? どうか私のためにと思って彼の許を訪ねて慰めてやって下さいませんか？ （久保田 1968: 330）

さらに一歩進んだ例として，スイスの作家 R. ヴァルザー（Robert Walser 1878～1956）による小品『森林火災』（ド *Der Waldbrand* 1914）の冒頭を引用しよう。

（67） ド Noch konnte man nichts bemerken, aber mit einem Male stand der ganze Berg in roten Flammen. … In der Stadt sahen die Menschen mit Fernrohren zu dem feurigen Schauspiel hinauf, und im See, am Fuß des Berges gelegen, spiegelte sich der scheckliche Brand in wundervollen Farben wider. ***Unten in den Straßen liefen und schrien und hüteschwenkten die erregten Bürger***. だれもまだ何かに気がつく間もなく，突然，山全体が赤い炎に包まれていた。〈中略〉町では人々が望遠鏡で燃えさかる光景を見上げ，山の麓にある湖にはこの恐ろしい火災が見事な色彩で映し出されていた。山下の路上では興奮した市民たちが叫び声を上げ，帽子を振りながら走り回っていた。 （Robert Walser: *Der Waldbrand*）

ド hüteschwenkten「帽子を振った」に注目しよう（清水 2006: 49, 2022d:

261f.)。これはドイツ語として例外的な抱合動詞 hüteschwenken「帽子を（Hüte 複数形←Hut）振る（schwenken）」の過去形である[9]。通常の動詞句表現 schwenkten die Hüte に代わって用いているのは，liefen und schrien und hüteschwenkten が「走り回り，叫び声を上げ，帽子を振っていた」という文字通りの並列ではないためである。schrien und hüteschwenkten は意味的に liefen に従属しており，liefen [schreiend und hüteschwenkend]「叫び声を上げ，帽子を振りながら走り回っていた」という現在分詞による liefen の修飾句にあたる。つまり，上述の「オ lopen/西フ rinne＋te-不定詞句」構文に対応する。ドイツ語のこの「A, B und C」は，[B und C] が A に従属した [A [B und C]] と等しく，定形で現れないはずの hüteschwenkten が「仮装不定形」（disguised infinitival）に姿を変えていると言える（Wiklund 2007）。このように，並列接続が従属接続の性格を帯びる現象を「疑似並列（疑似等位接続）」（pseudo-coordination）と言う。ただし，ドイツ語では稀な散発例にとどまるにすぎない。

3-3. 並列型姿勢動詞進行形（2）―北ゲルマン語の疑似並列と仮装不定形

アイスランド語を除く北ゲルマン語では，並列型姿勢動詞進行形の文法化が進んでいる。スウェーデン語を例に取ると，単純形も進行中の出来事を表すが(68)，「姿勢動詞＋och（英 and）＋V」構文はその意味を明示する(69)。姿勢動詞は，ス sitta/stå/ligga/gå/hänga（英 stand/sit/lie/walk（＝go）/hang）であり，弱く発音し，情報伝達の中心は後続の動詞（V）にある。

(68) ス Han ***läser*** en bok. 彼は（han）本を（en bok）読む/読んでいる（läser ←läsa）

(69) ス Han ***sitter och läser*** en bok. 彼は本を読んでいる（すわって（sitter ←sitta）そして（och, 英 and）読んでいる）

[9] 佐藤知己氏（アイヌ語学）の指摘に謝意を表したい。

(69)は「すわって，そして読んでいる」という 2 つの動作の並列にすぎないように見えるが，じつはそうではない。

(70)　ス ***Sitter*** ni ***och tittar*** på TV fortfarande ? — Nej, vi ***sitter*** inte längre ***och tittar*** på TV. 君たちは（ni）ずっと（fortfarande）テレビを（på TV）見ているのかい（sitter〜och tittar 現在形←sitta, titta）— いいえ（nej），私たちは（vi）もう（inte längre, 英 not longer 否定）テレビは見てい（sitter〜och tittar）ないわ
（清水/ラーション/當野 2016: 140 変更）

(71)　ス Vad ***satt*** han ***o***（＝och）{***läste***/**läste*** han}？　何を（vad）彼は（han）読んでいた（satt〜o（＝och）läste）（＝すわって（satt 過去形←sitta）そして（o（＝och））読んでいた（läste 過去形←läsa））のですか
（Wiklund 2007: 8）

(70)の最初の疑問文では，sitter「すわっている」だけが文頭に置かれ，och tittar「そして見ている」は文中に残っている。通常の並列文では，***Sitter***（ni）***och tittar*** ni〜? となるはずである。続く否定文は，否定詞 inte längre「もう〜ない」が sitter「すわっている」だけを否定する語順だが，意味的には sitter〜och tittar「すわって見ている」の全体が否定の焦点に含まれている。(71)でも，läste「読んだ」の目的語 vad「何を」が satt「すわっていた」を越えて，文頭に出ている。つまり，ともに「A och（英 and）B」の A だけが移動しており，並列構造（等位構造）から片方の要素だけを取り出してはいけないという「等位構造制約」（coordinate structure constraint）に違反している。よく知られているように，この制約には例外も散見されるが，上例のような単純な文で現れるのは奇妙である。それに，(71)*Vad [satt han] o（＝och）[läste han]？ は非文であり，「A and B」という並列構造になっていない。つまり，姿勢動詞 sitter/satt は語彙的意味を弱めて，「アスペクト標識」（aspect marker）になっており，「o（＝och）＋V」の V は仮装不定形に再分析されているのである。その原因は，不定詞標識 att [at:]（英 to）と並列接続詞

och [ɔk:]（英 and）を話し言葉ではともに [o:] と発音する事実に求められる。

逆に，att-不定詞（英 to-不定詞）が「o（＝och, 英 and）＋V」と交替する例もある。(72)は，注 6 で触れた英 hold の対応語による準進行形構文である（ス hålla på att-不定詞）。

(72) ス Jag ***höll på*** {***att lesa/och läste***} en bok. 私は（jag）本を（en bok）読んで（att lesa/och läste, 英 to read/and read 過去形）いた（höll på 過去形←hålla på） （清水/ラーション/當野 2016: 144）

(73) ス Han ***prövade*** {***att steka/o stekte***} en fisk. 彼は（han）魚を（en fisk）焼こうと（att steka/o（＝och）stekte, 英 to fry/and fried）試みた（prövade 過去形←pröva） （Wiklund 2007: 18）

この種のスウェーデン語の仮装不定形は，デンマーク語，ノルウェー語ブークモール，フェーロー語でも観察される（デ･ブ･フェ og, 英 and）。

(74) デ Hvad ***går*** du ***og laver***？ 君は近頃，どうしているの（＝何を（hvad）君は（du）歩いて（går 現在形←gå）そして（og）やっているのですか（laver 現在形←lave））（新谷/Pedersen/大辺 2014: 165 変更）

(75) ブ Hva ***sitter*** han ***og*** skriver？ 彼は（han）何を（hva）書いている（＝すわって（sitter 現在形←sitte）そして（og）書いている（skriver 現在形←skrive））のですか （Wiklund 2007: 10）

(76) フェ Hvat ***liggur*** hann ***og*** lesur？ 彼は（hann）何を（hvat）読んでいる（＝横になって（liggur 現在形←liggja）そして（og）読んでいる（lesur 現在形←lesa））のですか （ib. 10）

3-4. 並列型姿勢動詞進行形（3）—アフリカーンス語の疑似並列と複合初頭随伴

並列型姿勢動詞進行形への文法化をさらに進めたのが，アフリカーンス語の「姿勢動詞＋en（英 and）＋V」構文である。姿勢動詞は，アフ sit/staan/

lê/loop/hang（英 sit/stand/lie/walk/hang）である。オランダ語の「姿勢動詞＋te-不定詞」構文と比べると，「ｱﾌ en V＝オ te-不定詞」の関係が見えてくる。

（77） ｱﾌ Piet ***staan*** 'n glas water ***en drink***. ピト（男名）は水を 1 杯（'n glas water）飲んでいる（staan～en drink←drink 飲む）
（Ponelis 1979: 241）

（78） オ Piet ***staat*** een glas water ***te drinken***. 同上（staat～te drinken ←drinken）

（79） ｱﾌ Ek ***sit*** liewer televisie ***en kyk***. ぼくは（ek）むしろ（liewer）テレビを（televisie）見ている（sit～en kyk）ほうがいい
（Donaldson 2000: 115）

（80） オ Ik ***zit*** liever televisie ***te kijken***. ぼくは（ik）むしろ（liever）テレビを（televisie）見ている（zit～te kijken）ほうがいい

（77）は通常の ***en drink*** 'n glas water（英 ***and drinks*** a glass of water）の語順ではなく，drink が 'n glas water に後続した 'n glas water ***en drink*** になっている。アフリカーンス語はオランダ語と同じく，基本語順か OV 型なので，（78）のように en（英 and）は不定詞標識，drink は不定詞に再分析されていと言える（ｱﾌ en drink＝オ te drinken）。（79）（80）も同様であり，（60）の西フリジア語と同じく習慣・反復の意味を表す。

次は，完了形（81）（82）と不変化詞動詞（分離動詞）（83）（84）を含む例である。

（81） ｱﾌ Hulle ***het gesit en lees***. 彼（女）らは（hulle）読んでいた（het gesit 完了形←sit（オ zitten と同じく代替不定詞 sit も可）（Raidt 1983: 116）

（82） オ Zij ***hebben zitten te lezen***. 同上（zitten 代替不定詞）

（83） ｱﾌ Hy ***sit*** vir haar ***en aanstaar***. 彼は（hy）彼女を（vir haar）見つめて（en aanstaar）いる（sit～en aanstaar←aan|staar 見つめる，不変

化詞動詞）

(84)　オ　Hij ***zit*** haar ***aan te staren***. 同上（aan te staren←aan|staren 不変化詞動詞）

(81)では，完了の助動詞の het（英 has）が過去分詞 gesit（←sit すわっている）だけを支配し，en lees（英 and reads）の lees「読む」はそれとは無関係である。一方，(82)のオランダ語では，te-不定詞を従えた zitten（英 sit）が過去分詞 gezeten に代わる代替不定詞 zitten で現れ，不定詞標識 te に支配された不定詞 lezen「読む」が続いている。やはり，ｱﾌ en lees＝オ te lezen の関係にあると言える。さらに，(83)では，en aanstaar の aan|staar「見つめる」は不変化詞動詞（分離動詞）（hy staar～aan 彼は見つめる）にもかかわらず，不定詞のままである。これも(84)に対応し，ｱﾌ en aanstaar＝オ aan te staren の関係を示している。

さらに，アフリカーンス語には，「複合初頭随伴」（complex initial）または「連鎖動詞融合」（ｱﾌ skakelwerkwoordsamensmelting, Ponelis 1979: 244f.）と呼ばれる現象があり（カッコつきで示す），完了・話法の助動詞を除く使役・アスペクト動詞などで広範に例証される。「姿勢動詞＋ｱﾌ en＋V」構文と並んで，en（英 and）を欠く「ｱﾌ gaan（英 go）＋V」（～し始める）構文もその例である。

(85)　ｱﾌ **[*Sit en lees*]** sy die boek？　彼女は（sy）その本を（die boek）読んでいますか（sit en lês, 英 sits and reads）　（Ponelis 1993: 326）

(86)　ｱﾌ ***Gaan*** sy die boek ***lees***？　彼女はその本を読み始めますか　（ib. 326 変更）

(87)　ｱﾌ **[*Gaan lees*]** sy die boek？　同上　（ib. 326）

(88)　ｱﾌ **[*Gaan* [*lê en slaap*]]** hulle？　彼女は眠ろうとしているのですか　（ib. 327）

(89)　ｱﾌ Sy **[*staan Ø ril*]** effe. 彼女は少し（effe）震えている（staan Ø ril ←staan en ril 震える）　（Ponelis 1979: 241）

（85）では，姿勢動詞 sit（英 sit）が sit～en lees「読んでいる」の en lees を牽引して随伴し，[sit en lees] という複合動詞の連鎖を作っている。（87）[gaan lees]＜（86）gaan～lees「読み始める」も同様である。（88）は，gaan が複合初頭随伴による [lê en slaap]「眠っている」をさらに随伴した 2 重の複合初頭随伴である。なお，（89）のように「姿勢動詞＋en＋V」構文の en は話し言葉でよく脱落するが（Raidt 1983: 116, Ponelis 1979: 241），その場合には「gaan＋V」と変わらなくなる。

次の（90）sit～wegjaag「追い払っている」は，「姿勢動詞＋en＋V」構文の V が不変化詞動詞（分離動詞）weg|jaag「追い払う」（hy jaag～weg 彼は追い払う）になっている例である。（91）では，動詞 jaag（英 chase）だけが姿勢動詞 sit と複合初頭随伴 [sit en jaag] を作り，不変化詞 weg（英 away）が文末に残留している。

（90） ｱﾌ Waarom ***sit*** Jan die olifante ***en wegjaag***？ なぜ（waarom）ヤンは象たちを（die olifante）追い払っているのか（sit～en wegjaag）
（De Vos 2005: 90）

（91） ｱﾌ Waarom **[*sit en jaag*]** Jan die olifante ***weg*** __？ 同上 （ib. 90）

アフリカーンス語の「姿勢動詞～en-V」構文は，1925 年以降，オランダ語式の「姿勢動詞＋te-V」構文を駆逐した（Raidt 1983: 180）。その原因として，アフリカーンス語研究の第一人者ポネーリス（Fritz Ponelis 1942～2009）は，同言語では大多数の動詞が不定詞と定動詞（現在形・命令形；過去形はほぼ消滅）で語形的に等しく，定動詞が主語との一致という束縛から自由になった点を挙げている。その結果，姿勢動詞などが「en＋V」を牽引して，複合初頭随伴が発達したという説明である（Ponelis 1993: 325–331）。これは，英語の話し言葉で，I'll ***try to do*** my best の代わりに，I'll ***try and do*** my best. と言うのに似ている。主語と一致した[??]I ***tried and did*** my best. は不自然である。

4．不在構文

4-1．不在構文の特徴と分布

次に，進行形によく似た「不在構文」（absentive）について論じてみよう。これは De Groot（2000）を契機に注目されるようになった構文で，Vogel（2007）の調査では，ヨーロッパの 36 の公用語の中で 26 言語に確認されている。「～しに出かけて留守にしている」の意味を表し，主語の不在を除けば，限られた期間内に動作が進行しているという意味が進行形と共通している。主語が発話場面または話題の拠点から離れた場所にいて，動詞が表す行為を一時的に行うか（(92)以下多数），受けており(96)，またはその途上か帰途にあって，やがて戻る，つまり「復帰」することを含意する。①瞬間的達成を除く動作主性が高い動詞を中心に，定期的に行う行為を示すのが普通で，習慣・反復の意味を表すこともある(93)。一方，②動作主性が低い動詞や受動態でも用いる言語もある。ゲルマン諸語では，前者（①）はドイツ語やオランダ語，後者（②）は北ゲルマン語や北フリジア語フェリング方言(96)(100)(101)などが該当する。移動の意味の副詞（英 away/out）や移動動詞（英 go など）は伴わない。一般に話し言葉で好まれ，主語は 3 人称が多く，1 人称は伝言や書き置きに用い(94)(103)，2 人称現在形は稀（まれ）である[10]。なお，用例は以下でまとめて示すことにする。

形式的に見ると，ゲルマン諸語の不在構文には 2 種類がある。その 1 つは，ドイツ語やオランダ語の「不定詞＋ド sein/オ zijn（英 be）」構文で，動作主性が高い動詞を対象とする。この点で，前置詞句進行形（ド am/オ aan het/＋不定詞＋ド sein/オ zijn）に似ていると言えよう。その変種として，西フリジア語の(95)「te-第 2 不定詞＋wêze」，北フリジア語フェリング方言の(96)「tu（英 to)-不定詞＋wees（英 be）」，スイスドイツ語の(97)「ﾁｭ 不

[10] 中山（2011）はドイツ語の不在構文について，伝言や書き置き以外の 1 人称と 2 人称現在形の用例，移動動詞のド kommen（英 come）に相当する例を挙げている。

定詞標識 go（＜gen/gan/gon（ド gegen), Lötscher 1993: 187）＋不定詞＋sii（英 be)」の各構文も含まれる[11]。

(92) ド Er ***ist*** {wieder ***schwimmen***/was ***essen***}. 彼は{また泳ぎに/何かを食べに}行っている （Duden 2009[8]: 427, Krause 2002: 26 変更）

(93) ド Damals ***war*** er jeden Samstag ***tanzen***. 当時，彼は土曜日ごとにダンスに出かけていた（習慣・反復） （Ebert 2000: 631）

(94) オ Ik ***ben*** brood ***halen***. 私は（ik）パンを（brood）買いに（調達しにhalen）行って留守にしています（ben 現在形←zijn）（伝言） （*ANS* 1997[2]: 1034）

(95) 西フ Hja ***binne te ierdbeisykjen***. 彼らは（hja）イチゴを摘みに出かけている（binne te ierdbeisykjen 現在形←wêze, ierdbeisykje イチゴを摘む，探す） （Hoekstra/Ebert 1996: 92 変更）

(96) フェリ A hingst ***as tu bislauen***. 馬は（a hingst）蹄鉄をつけに連れて行かれて（別の場所に）いる（as tu bislauen 現在形←wees, bislau 蹄鉄をつける）（行為の受容） （De Groot 2000: 706）

(97) チュ Er ***isch go schwüme***. 彼は（er）泳ぎに出かけている（isch go schwüme 現在形←sii, go 不定詞標識＜gen/gan/gon（ド gegen)） （Vogel 2007: 272）

デンマーク語の「være {ude/henne} at（英 be {out/away} to)−不定詞」構文は，副詞 ude/henne（英 out/away）が必要なので，不在構文から除く扱いが一般的である。英語の「be off＋現在分詞 -ing」構文も同様である（英 John ***is off posting*** a letter. De Groot 2000: 717)。オランダ語の「uit（英 out)＋不定詞＋zijn（英 be)」構文は，uit が娯楽の意味を明示する要素なので，不在構文に含まれる（De Groot 2000: 712f., *ANS* 1997[2]: 1055f.)。

[11] この変種を独立した別の種類の不在構文とみなす意見もある（Vogel 2009: 9–11, 2007: 255f.)。

(98) オ Zij ***is*** {[??]***uit/Ø***} ***boodschappen doen.*** 彼女は（zij）（いつもの）買い物に出かけている（boodschappen doen 買い物をする）（日課）

（*ANS* 1997[2]: 1055 変更）

(99) オ Zij ***is*** {***uit/Ø***} ***winkelen***. 彼女は（休日の）ショッピングに出かけている（winkelen ショッピングする）（娯楽）

（*ANS* 1997[2]: 1055 変更）

もう1つは，3-2. で述べた疑似並列による「ス vara och（英 be and）+ V」構文である。スウェーデン語のほかに，ノルウェー語ブークモールとニューノシュク，フェーロー語にも認められる。動作主性が低い動詞にも使い，スウェーデン語では受動態も可能である。なお，アイスランド語には不在構文は存在しない。

(100) ス Gunnel ***är och får*** bilen besiktigad. グンネル（女名）は車を（bilen）点検してもらいに出かけている（är och får 現在形～besiktigad 過去分詞←vara, få もらう, besiktiga 点検する）（行為の受容）

（*SAG* 1999: 905）

(101) ス Han ***är och blir fotograferad***. 彼は（han）写真を撮ってもらいに行っている（är och blir fotograferad 現在形←vara, bli fotograferad 写真を撮られる←fotografera 写真を撮る）（受動態）

（De Groot 2000: 709）

(102) ニュ Jan ***er og skrivar*** eit brev. ヤン（男名）は手紙を（eit brev）書きに行っている（er og skrivar 現在形←vera, skriva 書く）（ib. 703）

(103) フェ ***Eri og fái*** mær millummála. Verði skjótur aftur.（私は）軽食を（millummála）取りに行って席をはずしています（eri og fái mær 現在形←vera, fáa; 英 am and get for myself）。（私は）すぐに（skjótur）戻ります（verði～aftur）（伝言）

（Lockwood 1977[3]: 140）

不在構文と進行形構文には共通点があり，英語の進行形（Vogel 2007: 279）やドイツ語の「beim＋不定詞＋sein」構文は不在構文をカバーする。ドイツ語では，bei が場所の意味をとどめることと関係がありそうである（(22)参照）。

(104) ド Wo ist Anna ? — Sie ist {??***am/beim***} ***Skatspielen***. アンナはどこにいるの — 彼女はスカート（トランプ遊び）をしてるよ
(Ebert 1996: 47)

4-2. 不在構文の成立—部分不在構文，完全不在構文，準不在構文

以前は，ドイツ語の不在構文は gehen「行く」の完了形から過去分詞 gegangen を省略した結果とみなされていた（Dal/Eroms 2014[4]: 111, Wilmanns 1922[2]: 176f., Blatz 1970（1896[3]）: 569f.）。しかし，これは不適切な扱いだったと言える。

(105) ド Er ***ist baden*** (***gegangen***). 彼は海水浴に出かけている（出かけた，gegangen がある場合） (Dal/Eroms 2014[4]: 111)

現在完了形 ist baden gegangen「海水浴に出かけた」は過去の移動を表すだけで，「復帰」の意味はない。過去分詞 gegangen を省略しても，継続中の「不在」とその後の「復帰」を含意する ist baden「海水浴に出かけている」の意味にはならないのである。heute Morgen「今朝」を補えば，完了形は移動した時点を表し（ド Heute Morgen ***ist*** er baden ***gegangen***. 今朝，彼は海水浴に出かけた），留守中の期間を表す不在構文（ド Heute Morgen ***ist*** er ***baden***. 今朝，彼は海水浴に出かけている）とは明確に異なる。スウェーデン語の「vara och（英 be and）＋V」構文に至っては，そもそも vara（英 be）の完了形は ha gått（英 have gone）である。スピーヌムの gått（英 gone）を省略しても vara（英 be）は残らず，「現在完了形＋och＋現在形」によるス *Han ***har gått och badar***. も意味をなさない。

そこで，Vogel（2009: 11f.）（2007: 257f.）は移動動詞構文「不定詞＋ド（weg）

gehen」（～しに行く）と関連づけ，不在構文「不定詞＋sein」を始動アスペクトを表す（weg）gehen（英 go（away））を継続アスペクトを表す sein（英 be）で置換した派生構文とみなしている。移動動詞構文が表す「移動による変化＋結果としての状態」から，「結果としての状態」に焦点を移したのが不在構文であるという趣旨である。以下では，さらに一歩進んで，sein（英 be）自体に「～に出かけている」という移動による結果としての状態の意味があるとする捉え方を提唱したい。

「復帰」の意味に注目すると，不在構文は 2 手に分かれる。1 つは，英 be の対応語の過去形ないし完了形に限定される「部分不在構文」（ド Teilabsentiv）で，過去時の意味から「不在」と「復帰」が含意される。もう 1 つは，英 be の対応語の現在形でも使う「完全不在構文」（ド Vollabsentiv）で，現在形の場合には「復帰」は予測・期待にとどまる。したがって，前者のほうが不在構文にしやすいことになり，それだけ不在構文としての発達が遅れていると言える。

さて，一般にゲルマン諸語では完全不在構文が主流だが，英語は微妙である。① 英 The deceased ***has gone to heaven***. と ② 英 She ***has been to Europe*** many times. を比べてみよう。①移動の意味の has gone「行ってしまった」（とくにイギリス英語）と②経験の意味の has been「行ったことがある」の区別は示唆的である。②の has been は，不定詞の代わりに場所の副詞句を伴った不完全不在構文の変種とみなせるだろう[12]。

ドイツ語やオランダ語には，現在形でも使える完全不在構文の変種がある。英語の②と合わせて，これを「準不在構文」（quasi-absentive）と呼ぶことにする。

（106） ド Er ***ist*** {***über Land/aufs Feld/nach Amerika***}. 彼は {田舎を回って/野良仕事に出て/アメリカに行って} 留守にしている

[12] この英 to は方向の意味ではなく，静止した位置の意味に由来する（ド *zu* Hause 自宅で，朝尾 2019: 231）。

（Wilmanns 1922[2]: 177）

（107） オ Mijn man is niet thuis. Hij ***is naar een vergadering*** voor zijn werk. 主人は（mijn man）家に（thuis）いません（is niet）。仕事で（voor zijn werk）会議に（naar een vergadering）行っています（hij is 現在形←zijn, 英 be） （De Jonghe 2010: 31 変更）

（108） オ Ik ***ben naar het strand geweest***. Ik heb lekker in de zon gelegen en ik ben hartstikke bruin geworden. ぼくは（ik）海辺に（naar het strand）行ってきた（ben～geweest 現在完了形，ド bin～gewesen/英 have been）。ぼくは（ik）気持ちよく（lekker）ひなたぼっこして（ben～in de zon gelegen），それで（en）すっかり（hartstikke）日焼けしたよ（ik ben～bruin geworden 現在完了形） （De Boer/Lijmbach 2000: 72）

ゲルマン諸語全体の考察は別の機会に譲るとして，ドイツ語史に限ると，「不定詞＋sein」は 11 世紀末に進行中の意味で例証される。そのルーツは，1．で述べた英語の進行形の発達に似て，「現在分詞 -ende＋sein」の語末音 -de の脱落による不定詞との混交に求められる。15 世紀から頻度を増し，17 世紀以降に衰退したが，これに代わったのが準進行形の「am＋不定詞＋sein」だった。一方，不在を表す「不定詞＋sein」の最古の例は，1200 年頃の『ランツェレト』（ド *Lanzelet*）の会話の箇所に過去形で現れる。しかし，上記の現在分詞由来の不定詞による「不定詞＋sein」（～している）とは，起源が異なると考えられている（Vogel 2009: 14, 2007: 273f.）。

不在構文の不定詞は現在分詞と違って，古くは目的の意味を持ち，場所の副詞句と共通点がある。英 be とその対応語には，移動とその結果としての状態を併せ持つ「出かけている」の意味があると考えられる。一時的行為の継続と一定の時間後の復帰を含意する不在構文との関連は，容易に理解できるだろう。

これに関連して，存在を表す「ド es gibt（←geben 与える）＋対格」（～がある）と残留の意味のド bleiben「とどまる」の意味的変遷も連想される。ド

Gestern ***gab es*** ein Erdbeben.「昨日，地震があった」からうかがえるように，ド es gibt は出来事・変化の意味から，結果としての状態を表すようになった。ド bleiben「とどまる」は逆の発達を遂げ（ド ***Bleiben*** Sie ***stehen***, oder wir schießen！ 止まれ，さもないと撃つぞ），大陸北ゲルマン語でも，14 世紀末に中低ドイツ語の blīven を借用したス・ブ・ニュ bli/デ blive が 15 世紀末に「〜になる」の意味に転じた（ス Han ***blev*** ⦃sjuk/läkare⦄. 彼は（han）⦃病気（sjuk）/ 医者（läkare）⦄になった（blev 過去形←bli），Hellquist 1980[3]: 79, Nielsen 1989[4]: 56）。場所の移動および状態の変化とその結果としての状態の意味は，互いに無縁ではないのである。

参考文献

ANS（*Algemene Nederlandse spraakkunst 1-2*）. Haeseryn, W./Romijn, K./Geerts, G./De Rooij, J./Van den Toorn, M. C.（1997[2]）Groningen/Deurne: Martinus Nijhoff Uitgevers/ Wolters Plantyn.

朝尾幸次郎（2019）『英語の歴史から考える英文法の「なぜ」』大修館書店

Bhatt, Christa/Schmidt, Claudia Maria（1993）Die *am* + Infinitiv-Konstruktion im Kölnischen und im umgangssprachlichen Standarddeutschen als Aspekt-Phrasen. In: *Linguistische Berichte. Sonderheft*. 5. 71–98.

Blatz, Friedrich（1970（1896[3]））*Neuhochdeutsche Grammatik mit Berücksichtigung der historischen Entwicklung der deutschen Sprache. 2. Bd*. Karlsruhe: Lang.（1970 復刻 Sansyusya）

Booij, Geert（2000）Inflection and Derivation. In: Booij, Geert et al.（eds.）*Morphologie/ Morphology. HSK 17. 1*. Berlin/New York: De Gruyter. 360–369.

Dahl, Östen（ed.）（2000）*Tense and Aspect in the Languages of Europe. Eurotyp 20–6*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Dal, Ingerid/Eroms, Werner（2014[4]）*Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage*. Berlin/Boston: De Gruyter.

De Broer, Berna/Lijmbach, Birgit（2000）*Powerkurs für Anfänger Niederländisch*. Stuttgart/Düsseldorf/Leipzig: Klett.

De Groot, Casper（2000）The Absentive. In: Dahl（ed.）693–719.

De Jonghe, Annelies（2010）*Praktisches Lehrbuch Niederländisch*. Berlin et al.: Langenscheidt.

De Vos, Mark（2005）Quirky Verb-Second in Afrikaans. Complex Predicates and Head Movement. In: Hartmann, Jutta M./Molnárfi, László（eds.）*Comparative Studies in Germanic Syntax*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins. 89–114.

Donaldson, Bruce（2000）*Colloquial Afrikaans*. London/New York: Routledge.

Ebert, H. Karen（1996）Progressive Aspect in German and Dutch. *Interdisciplinary Journal for Germanic Linguistics and Semiotic Analysis* 1–1. 41–62.

Ebert, H. Karen（2000）Progressive Markers in Germanic Languages. In: Dahl（ed.）605–653.

Ebert, H. Karen/Hoekstra, Jarich（1996）The Progressive in West Frisian an North Frisian. Similarities and Areal Differences. *NOWELE* 28/29. 81–101.

Einarsson, Stefán（1949[2]）*Icelandic*. Baltimore/London: The Johns Hopkins University Press.

橋本　功（2005）『英語史入門』慶應義塾大学出版会

Hellquist, Elof（1980[3]）*Svensk etymologisk ordbok. A-N/O-Ö*. Malmö: Gleerups.

保坂道雄（2014）『文法化する英語』開拓社

Kress, Bruno（1982）*Isländische Grammatik*. Leipzig/München: VEB Verlag Enzyklopädie/Hueber.

久保田肇（1968）『ドイツ文章接合品詞の研究』アテネ出版印刷株式会社

Lockwood, W. B.（1977[3]）*An Introduction to Modern Faroese*. Tórshavn: Føroya Skúlabókagrunnur.

Lötscher, Andreas（1993）Zur Genese der Verbverdopplung bei *gaa*, *choo*, *laa*, *aafaa*（‚gehen', ‚kommen', ‚lassen', ‚anfangen'）im Schweizerdeutschen. In: Abraham, Werner/Bayer, Josef（Hrsg.）*Dialektsyntax*. Opladen: Westdeutscher Verlag. 180–200.

村上重子（2003）『ドイツ語文法シリーズ 6 接続詞』大学書林

中尾俊夫（1983[2]）『英語発達史』篠崎書店

中尾俊夫/児馬　修（1997[3]）『歴史的にさぐる現代の英文法』大修館書店

中山　豊（2011）「ドイツ語の『不在構文』について」『慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学』47. 151–167

Nielsen, Niels Åge（1989[4]）*Dansk etymologisk ordbog. Ordens historie*. København: Gyldendal.

Ponelis, F. A.（1979）*Afrikaanse sintaksis*. Pretoria: Van Schaik.

Ponelis, Fritz（1993）*The Development of Afrikaans*. Frankfurt am Main et al.: Lang.

Raidt, Edith H.（1983）*Einführung in Geschichte und Struktur des Afrikaans*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.

SAG（*Svenska Akademiens grammatik*）*4. Satser och meningar*. Teleman, Ulf/Hellberg, Staffan/Andersson, Erik（red.）（1999）Stockholm: Svenska Akademien.

清水育男/ウルフ・ラーション/當野能之（2016）『スウェーデン語』大阪大学出版会

清水　誠（2003）『西フリジア語文法―現代北海ゲルマン語の体系的構造記述とゲルマン語類型論構築のための基礎的研究』（論文博士学位請求論文）北海道大学（https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/32659）

清水　誠（2006）『西フリジア語文法―現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』北海道大学出版会

清水　誠（2012）『ゲルマン語入門』三省堂

清水　誠（2019）「ドイツ語から見たゲルマン語―名詞の性，格の階層と文法関係」『北海道大学文学研究院紀要』158．37–76.

清水　誠（2020）「ドイツ語から見たゲルマン語（2）―属格と所有表現」『北海道大学文学研究院紀要』160．37–96.

清水　誠（2021a）「ドイツ語から見たゲルマン語（3）―名詞の性の発達と複数形の形成」『北海道大学文学研究院紀要』162．35–101.

清水　誠（2021b）「ドイツ語から見たゲルマン語（4）―冠詞と指示詞」『北海道大学文学研究院紀要』163．1–22.

清水　誠（2021c）「ドイツ語から見たゲルマン語（5）―人称代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』164．19–41.

清水　誠（2021d）「ドイツ語から見たゲルマン語（6）―３人称代名詞，再帰代名詞，所有代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』165．31–60.

清水　誠（2022a）「ドイツ語から見たゲルマン語（7）―２人称代名詞と関連表現」『北海道大学文学研究院紀要』166．1–27.

清水　誠（2022b）「ドイツ語から見たゲルマン語（8）―不定詞と分詞」『北海道大学文学研究院紀要』167．1–30.

清水　誠（2022c）「ドイツ語から見たゲルマン語（9）―動詞の強変化と弱変化，ウムラウト，人称語尾」『北海道大学文学研究院紀要』168．1–35.

清水　誠（2022d）『ゲルマン語歴史類型論』北海道大学出版会

清水　誠（2023a）「ドイツ語から見たゲルマン語（10）―強変化動詞，過去現在動詞，母音交替」『北海道大学文学研究院紀要』169．1–39.

清水　誠（2023b）「ドイツ語から見たゲルマン語（11）―過去形と完了形：時制，アスペクト，話法」『北海道大学文学研究院紀要』170．1–33.

新谷俊裕/Thomas Breck Pedersen/大辺理恵（2014）『デンマーク語』大阪大学出版会

Ten Cate, Abraham P./Lodder, Hans G./Kootte, André（2013²）*Deutsche Grammatik. Eine kontrastiv deutsch-niederländische Beschreibung für den Zweitsprachenerwerb*. Bussum: Coutinho.

Thráinsson, Höskuldur（2007）*The Syntax of Icelandic*. Cambridge: Cambridge University Press.

Van Ness, Silke 1994 Pennsylvania German. In: Russ, Charles V. J.（ed.）*The Dialects of*

Modern German. London: Routledge. 420–438.
Van Pottelberge, Jeroen 2004 *Der am-Progressiv*. Tübingen: Narr.
Visser, F. Th.（1969（1978 Reprint））*An Historical Syntax of English. Part III-1*. Leiden: Brill.
Vogel, Petra M.（2007）*Anna ist essen!* Neue Überlegungen zum Absentiv. In: Geist, Ljudmila/Rothstein, Björn（Hrsg.）*Kopulaverben und Kopulasätze*. Tübingen: Niemeyer. 253–284.
Vogel, Petra M.（2009）Absentiv. In: Hentschel/Vogel（Hrsg.）7–15.
Wiklund, Anna-Lena（2007）*The Syntax of Tenselessness. Tense/Mood/Aspect-agreeing Infinitivals*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
Wilmanns, Wilhelm（1922²（1906））*Deutsche Grammatik. Gotisch, Alt-, Mittel- und Neuhochdeutsch. Bd. 3-1*. Berlin: De Gruyter.
安井　稔/久保田正人（2014）『知っておきたい英語の歴史』開拓社

正誤表

前回までに発表した(1)～(12)について，以下に確認した誤植・誤記の訂正を記しておく（「誤＞正」の順）。

＊「ドイツ語から見たゲルマン語―名詞の性，格の階層と文法関係」『北海道大学文学研究院紀要』158（2019: 37–76）
p. 39　下から 3 行目：1740 年頃までに ＞ 1850 年頃までに
p. 47　下から 5 行目：例外なく当てはまる ＞ きわめて広範囲に当てはまる
＊「ドイツ語から見たゲルマン語 (2)―属格と所有表現」『北海道大学文学研究院紀要』160（2020: 37–96）
p. 51　上から 2 行目：hund***a***nn***a*** ＞ hund***a***n***na***　hund-***a*** + (-i)nn-***a*** ＞ hund-***a*** + (-i)n-***n***a
p. 52　上から 7 行目：[hundann***a***] ＞ [hundan***na***]
p. 57　下から 4 行目：*sie ＞ *sie*ⱼ*
p. 65　上から 2 行目：与格←主格 ＞ 対格←主格
p. 73　下から 6 行目：d'r「彼女の」 ＞ haar「彼女の」
p. 76　下から 1 行目：第 9 章（37）＞ 9.（37）
＊「ドイツ語から見たゲルマン語 (3)―名詞の性の発達と複数形の形成」『北海道大学文学研究院紀要』162（2021: 35–101）
p. 44　上から 2 行目：de 彼女ら ＞ de 彼ら
p. 75　上から 11 行目：*tunþus ＞ *tunþuz
＊「ドイツ語から見たゲルマン語（4)―冠詞と指示詞」『北海道大学文学研究院紀要』163（2021: 1–22）
p. 4　上から 8 行目：beurre ＞ viande　　バター ＞ 肉
　　上から 9 行目：Butter ＞ Fleisch　　beurre ＞ viande

＊「ドイツ語から見たゲルマン語(5)―人称代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』164(2021: 19–41)

p. 26　上から 3 行目：所有代名詞＞独立所有格

p. 26　下から 14，8 行目：ig [iɣ] ＞ ig [iɣ]

p. 29　下から 3 行目：ア okkum ＞ okkur　　ア þykkum ＞ ykkur

p. 34　上から 2，10 行目：der [d̥ɛʀ] ＞ der [d̥æʀ]　　***Der*** [d̥ɛʀ] ＞ ***Der*** [d̥æʀ]

＊「ドイツ語から見たゲルマン語（6)―3 人称代名詞，再帰代名詞，所有代名詞」『北海道大学文学研究院紀要』165（2021: 31–60）

p. 35　下から 5 行目：― it/sy（オ zij の借用）＞ /sy（オ zij の借用)― it

＊「ドイツ語から見たゲルマン語（7)―2 人称代名詞と関連表現」『北海道大学文学研究院紀要』166（2022: 1–27）

p. 4　下から 15 行目：Faust 2017–20 ＞ Faust 2717–20

p. 17　上から 10 行目，下から 4 行目：17 世紀末 ＞ 18 世紀初頭

＊「ドイツ語から見たゲルマン語（8)―不定詞と分詞」『北海道大学文学研究院紀要』167（2022: 1–30）

p. 4　上から 9 行目：hafaþr ＞ hafðr

p. 5　上から 12 行目：Ø/Ø/Ø ＞ sjongen/lewin/daansin

p. 6　上から 2 行目：⑨北フリジア語フェリング方言では衰退 ＞ では衰退

p. 16　上から 2 行目：↔英 a problem [***easy to solve***] [解くのが容易な] 問題 ＞ 削除

＊「ドイツ語から見たゲルマン語（9)―動詞の強変化と弱変化，ウムラウト，人称語尾」『北海道大学文学研究院紀要』168（2022: 1–35）

p. 3　下から 7 行目：hulf***um(mês)***/fuor***um(mês)*** ＞ hulf***um(ês)***/fuor***um(ês)***

＊「ドイツ語から見たゲルマン語（10)―強変化動詞，過去現在動詞，母音交替」『北海道大学文学研究院紀要』169（2023: 169. 1–39）

p. 4　下から 5 行目：後者の「溝」＞ 前者の「溝」

p. 7　下から 8 行目：有生 ＞ 有声

p. 16　上から 8 行目：[g***i***biþ] ＞ [g***i***biþ]^{B}

p. 18　下から 1 行目：l***au***fen [aʊ]^{I6} ＞ l***au***fen [aʊ]^{E16}　　l***äu***ft [ɔʏ]^{I6} ＞ l***äu***ft [ɔʏ]^{E16}
gel***au***fen [aʊ]^{I6} ＞ gel***au***fen [aʊ]^{E16}

p. 22　下から 14 行目：b***ei***ßen 噛む― b***i***ssen ＞ b***i***ss（＜中高ドイツ語 b***ei***z）― b***i***ssen ←b***ei***ßen 噛む

＊「ドイツ語から見たゲルマン語（11)―過去形と完了形：時制，アスペクト，話法」『北海道大学文学研究院紀要』170（2023: 1–33）

p. 4　上から 4 行目：Thráinsson et al. 2004: 7 ＞ Thráinsson et al. 2004: 76

p. 12　下から 11 行目：（(18)～(21) ＞（(20)～(23)

p. 14　下から 2 行目：(Bauer 1997[11]: 107) ＞ (Bauer 1997[11]: 107 変更)

p. 15　上から 1 行目：hy kom ＞ kom

p. 24　下から 8 行目：(44) hefur skrifað よりも (45) ＞ (45) hefur skrifað よりも (44)

p. 25　下から 5 行目：アイスランド語の (39) ＞ アイスランド語の (40)